世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The sight of Musashino by countryman in Tokyo : A Discussion of "Ohgon Jidai (the Golden Time)" authored by Itsuki Hiroshi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 忍 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/600

上京者の武蔵野

――五木寛之「黄金時代」論[1]――

土屋　忍

五木寛之の初期の短篇小説「黄金時代」（『新潮』一九六七・八）の一節である（傍線は引用者、以下同様）。主人公の「ぼく」は、地元九州で病気療養中の父親に「入学金さえ払ってもらえば、後は一銭の仕送りがなくともやってみせる」と宣言をして入学金の工面だけをしてもらい、二十歳のとき、東京の大学に進学する。上京後、故郷の父から届いた手紙には、「学校も仕事も、予定通り旨く行っている、上京以来二キロほど肥った」と短い返事を書く。またやや長めの手紙を認めては「思い切って上京して本当に良かった」「住む所も、金もあるし、友人も沢山できた、ロシア文学も原語で読んでいる」「今は自分の黄金時代かも知れない」と言ってのける。

小さな町の古い神社の床下で

六月のはじめ、ぼくはやっと定住所をみつけた。それは武蔵野を走る私鉄の沿線の小さな町にある古い神社だった。その神社の床下は、人目につかぬ絶好の仮眠所のように思われた。広々とした床下には、祭礼に使う紅白の幕が置いてあり、それにくるまって寝ると気持よく眠れそうだった。筵や、戸板などもある。まず文句のつけようのない宿といえた。

ぼくは、その場所を、学徒援護会からのアルバイトの帰りに発見し、その晩から泊る事にしたのである。

しかしそれらの言葉は、入院中の父を安心させるための嘘であり、実際は「学校」にもろくに行かず、「ロシア文学」を「原語で読ん」だのも一回だけ。「仕事」にしても、定まったアルバイトさえ見つかっていない。「金」もなく食扶持もなく、「供血」という名の売血を頼みの綱とするしかない。「二キロほど肥った」どころではなく、栄養失調と貧血で目も霞む。「住む所」に至っては、「神社の床下」でどうにか雨露をしのいでいるのが実態である。やや事実に近いのは「友人が沢山できた」のくだりくらいなのだが、当の「ぼく」は、自身の現状を明るく前向きに捉えており、それを象徴するのが「黄金時代」という言葉である。

九州出身の若い男（ぼく）と東北出身の若い女（立野陽子）が東京の地で出逢い互いに惹かれあうのだが、初めてデートしたその日に男が女を傷つけてしまう、というプロットをもつ「黄金時代」は、一種の淡い恋物語でもある。成就しない恋物語は青春小説の定番であり、地方出身者がつくる東京物語は近代小説の一類型である。そうした標準的な枠組を借りながら表現されているのは、ひとりの大学生の生きる姿とその場所、そして時代である。人物と時空間はきわめて個別具体的に描かれているわけだが、ここでは、それらを正確に理解することから導き出される位相にこそ眼目をおきたい。

まず、場所の表象を多角的に分析した上で、「神社の床下」という場所がテクスト内でもつ意味を明らかにする。次に、テクストに書き込まれた事象や年号を同時代的な現象の延長線上で捉えて読み解き、「ぼく」の生きた時代の理解に努める。最後に、登場人物たちとの関係性の中で「ぼく」がどのような位置にあるのかを整理して、考察したい。

*

最初に、「ぼく」のような大学生の苦しい生活を支える場所についてだが、描かれているのは九段の「学徒援護会」、大学地下の「生活協同組合」、そして飯田橋の「職業安定所」である。すべて実在する場所であり、実際の地名とともに記されている。この中でいわゆる職安だけは、学徒や生協のような学生対象の斡旋所ではな

い。一般の求職者を対象にした公的機関である。そこに行くことは、学生アルバイトから労働者の道へと踏み出すことを意味しており、実際、「ぼく」が売血工場の存在を具体的に知るのも職安においてである。

「寝る場所」については、やはり「学校の近く」から探し始めるのだが適当なところが見つからない。「文句のつけようのない宿」を「武蔵野を走る私鉄の沿線の小さな町にある古い神社」に「発見」したのは、「学徒援護会のアルバイトの帰り」であり、「学校」(「大学」)の圏域の外延でなんとか解決した格好である。大学の名は伏せられているのだが、「飯田橋から神楽坂を抜け」た先にあり、ロシア文学を学べて「ソ研」のあるところとされている。したがって、「黄金時代」を自伝的小説だと考えず、そして五木寛之のことをほとんど知らない若い読者も、注意深くテクスト内の地誌を読めば、「ぼく」の大学が早稲田〜高田馬場界隈にあるとわかるように書かれている。それに対して「武蔵野を走る私鉄」は、高田馬場を停車駅にもつ西武新宿線だろうというところまでは推測できるのだが、「小さな町」の名も神社の名も明記されておらず、それ以上は追求できない。

ここでテクストを離れて外部の情報を参照するならば、「小さな町」が田無であり、「神社」が田無神社であると仮定することも可能である。というのも、五木寛之のエッセイに次のような箇所があるからだ。

私が上京したのは、昭和二十七年の春である。早稲田の露文科を受けて運よく合格したので、入学するために九州からやってきたのだ。(下略)

今夜どこに泊るかさえも決まってはいないのだが、それほど心配もしていない。北鮮の平壌で敗戦を迎えて引揚げまでの二年間に、変な糞度胸がついていた。雨さえしのげれば、それでいいという感覚である。ともかく、さし当って今度お世話になる大学へ行ってみようと電車に乗りこんだわけだ。

早稲田に着いたときは、あたりはすでに暗くなりかけていた。大隈講堂の時計台の上に、冷えびえとした夜の気配が漂っている。文学部の校舎を眺め、体育館のあたりを一廻りすると、もう夜だった。ど

こかに今夜の宿を定めなければならない時間である。（下略）

（上略）早稲田という学校を自分の学校だと信じ込んでいたのが、あっさり突き放されたような気がした。大学というのは、学生とは別に存在する何ものかなんだな、という感じだった。その予感は正しかった。（下略）

私が神社の床下に寝泊りしだしたのは、その晩からである。大学の近くの穴八幡の社殿が、まず最初のねぐらになった。この床下はスペースが広く、高さもかなりあるのだ。夜、毛布にくるまって寝ていると、しばしば恋人たちがやって来て私を悩ませた。

（中略）

二十七年の春から夏にかけて、あちこちの神社にお世話になった。その中でも最も快適だったのは田無神社の床下である。ここには、祭礼に使う紅白の幔幕が置いてあって、それにくるまって寝ると、実にいい感じだった。

神様のほうはともかく、氏子のかたがたには、まことに申し訳ないことをしたものだと思う。そのうち折をみて、新しい幔幕を寄贈するつもりだ。

（「放浪―この素晴らしきもの」『文藝春秋』一九六七・三）

テクスト内の設定年代や「ぼく」の履歴とも合致する記述であり、五木自身の体験を綴ったこうした箇所を参照し、「黄金時代」を『青春の門』に先駆けた自伝的小説だと捉えることもできるだろう。自伝的小説だとするならば、モデルや舞台を特定してみたくなるのが人情なのかもしれない。なるほど、田無神社の看板には、五木寛之が一時期ここで暮したという伝記的事実が記されているし、田無神社と五木寛之の関係が女性週刊誌に紹介されたこともあるようだ。人情に訴える商いとしての小説流通を考えるなら理解できる話ではある。だが、人情や時空を超えて多様な読者にもテクストが届けられることを想えば、テクストに書かれていない外部の情報はそれほど重要ではなくなるにちがいない。

最も重要なのは、実在の場所を訪れた体験に基づきつ

つもテクスト内で微妙に描き分けられている場所と場所との関係性であろう。

テクスト内には主に四つの場所が描き分けられている。新宿と「ぼく」の通う大学と製薬会社の工場、そして神社の床下である。まず新宿は、「紀伊國屋」と「風月堂」という実在する書店と喫茶店の名を用いて表出された繁華街である。前者は、洋書売り場を兼ね備えた書店であることが強調されており、「ぼく」はそこで店員と緊張したやりとりを余儀なくされ、発音は読めるが意味のわからないロシア語の原書を購入する。後者の風月堂は、珈琲を飲みながらクラシック音楽をきく場所である。いわゆる名曲喫茶であり、ここでも「ぼく」は緊張を強いられる。慣れない者にとっては背伸びを必要とする文化的空間として描かれる「新宿」は、記号化された東京のイメージを体現するといってよいだろう。

大学のある場所もまた、前述のように「飯田橋から神楽坂を抜け」た先にあると示唆されており、地誌を読めば新宿の近くであることがわかる。大学で繰り広げられるのは、授業のこと、学生運動のこと、時事的な話題など、大学生ならではの会話であり、そこでもまた、ひとつの記号的な文化圏が形成されている。

工場も同様である。「京成電車」で行ける「郊外」の「小さな駅」にある「葛飾工場」と記されることにより、新宿からはやや離れた葛飾周辺にあり、工場には工場の、葛飾には葛飾の文化があるのがわかるようになっている。「北千住の何とか楼って店の女」で「病気持ち」と噂される「若い娘」や「金に困っているわけでもないのに」来ているという「錦糸町の食堂の養子」、「カードだけ貸して分け前もらう」「男のクズ」でありかつ「おれたちより」「利口だ」とされる男。他方で、供血のために工場を訪れるこれらの者たちを迎えるのは若い女性たちである。「検査室」には「注射針を突き刺」し「比重」の検査をするふたりの「若い娘」がいる。奥の「採血場」には、「真赤な果実の収穫を楽しんでいる外国の娘たちのように見え」る「若い看護婦たち」が「両腕に血液の壜をいくつも抱えて談笑」している。みな工場に集う労働者であるが、労働者間には明らかに経済的な格差がみられる。にもかかわらず、大学生の間で話題に

なっている「メーデー」や「デモ」について語られることがないことにも留意したい。

最後に、神社のある場所だが、ここだけは、「武蔵野を走る私鉄の沿線の小さな町にある古い神社」とぼんやり表現されている。「武蔵野を走る私鉄」が西郊に向かっているという見当はつくのだが、「小さな町」の「古い神社」がどの駅の近くにあるかは記されない。駅前に商店街があり食堂もあるとは記されてはいるが、都会の大学生らしい背伸びをした会話も、下町の労働者の気取りのないやりとりも、繁華街ならではの空気も描かれてはいない。「武蔵野」のどこかの「小さな町」は、同じ郊外であっても京成電車で向かう工場のある地域とは方向も性格も異なり、また、新宿からも大学からもやや離れたところにある。山の手からも下町からも隔てられ、文化的にも心理的にも「東京」から離れたイメージをもち、記号化未然のいわば顔のない町として表出されているのだ。古い神社の床下が、「ぼく」にとっての固有の空間となり、「やっと」「見つけた」「定住所」となり得たのは、言語的な特徴も文化的な刺激も近代的な祝祭もみられないからであろう。そのかけがえのない理想的な場所は、武蔵野の地にこそ見出されたのである。

売血のリアリティ

二十一世紀を生きる大学生には馴染みが薄いかもしれないが、売血という言葉には、奇妙な懐かしさを喚起する響きがある、という証言めいたことから述べてみたい。前世期後半において、売血とは、死体洗いとともに、日本全国でよく知られた伝説のアルバイトだった。売血と死体洗いのイメージの起源は、一般的には五木寛之の『青春の門』（一九六九～）と大江健三郎の「死者の奢り」（一九五七）である（前者の起源としては実は「黄金時代」のほうが早い）。てっとり早く金銭を工面できるデンジャラスでギャンブル性の高いアルバイトのイメージは、ほぼ同様の仕事がいつの時代にも実在するためか、小説を読んでいない若者の間にも知られており、奇妙なリアリティを保ち続けていたものと思われる。その種のアルバイトは、自由を求める大学生の生活をギリギリのところで支える防波堤であった。同じ防波堤でも、保護

者の職業や内定先の企業を担保にしてまとまった資金を貸し出す学生ローン（大学生相手の高利貸業者）とは違う。つまり、後ろ楯を担保にした自由とは異なるところに単なる負け惜しみとささやかなと自負心がこめられていたのである。

筆者が大学生だった一九九〇年前後において、「黄金時代」のような小説は、気恥ずかしいほどのリアリティを備えていた（もちろんそのリアリティは、一九六〇年代の同時代読者にとってのリアリティとはまったく異なるものである）。当時は、いかにも（いそう・ありそう）という感じが漂っており、目を背けたい思いでいっぱいにさえなった。なぜ「バブル」と呼ばれた時期に、神社の床下に野宿して学徒援護会に通う四十年前の大学生の姿をありありと思い浮かべることができたかというと、そういうスタイルの（つまり野性的な貧しさをウリにする）学生が、真に迫った苦学生よりもはるかに多く見られたからである。「バブル」によってもたらされたのは、貧乏学生の消滅などではなく、貧乏学生の大衆化、通俗化、ブランド化であった。

「黄金時代」の「ぼく」は、売血で得たお金で食糧を買い込み、神社の床下でまったり暮す。昼寝をしたり、女の子のことを考えたり、「退屈すると、羽目板の隙間からさし込んでくる光で、ロシア語の変化を暗記したり、文庫本のレールモントフを読んだり」するのだが、このときの「ぼく」の身体には、野心、好奇心、万能感が漲っている。大学生とは、（ひそかに）自学するものである、レールモントフの如く権力と命を賭けて闘う詩人に（こそ）栄光をみる、といった感覚は、言葉とともに世界を生きようとする若者にとっては、語り継がれるべくファッションでもあった。

売血を伝える小説的表現に見出されるのは、そうした読者共同体的なリアリティ（あるいは文学的感傷）だけではない。日雇い労働者の血液を購入する「供血」制度を、闇の機関ではなく製薬会社の工場が担っていると明記する「黄金時代」の描写は、テクストの現在時である一九五〇年代と作者の意図をはるかに超えて、戦後復興を遂げて豊かになっていく将来の日本の実態にも届くことになる。そうした射程を踏まえるなら、〝大学生が売

血するなんて、時代が違うとしか言いようがない…、よほど貧しかったのね…〟という納得の仕方をテクストは断固として拒むのである。

一九六〇年代には献血が推進されるようになるが、それでも製薬会社による売血（有料での採血）は継続され、一九九〇年までは合法的に存続する。売血が禁止されるようになってからも、献血者に金券（図書券や商品券など）を渡していることが問題になり、金券目当てでアルバイト感覚の献血も一種の売血だとみなされた。結局、有料での採血が法的に禁止されたのは、「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律」（二〇〇三年施行）においてであり、それはバブル経済崩壊からＩＴバブルを経た二十一世紀のことであった。つまり、テクストの設定年代である一九五〇年代においても、発表年代である一九六〇年代においても、日本の製薬会社は売血を担っており、つい最近まで日本政府は売血的行為を公認していたのであり、その点では古びていないのである。

このように「黄金時代」には、売血を存続させてきた戦後日本社会の一側面が記録されているという点で探訪記的リアリティが認められるのだが、ここでは、それ以上に、売血行為に手を染める当事者の意識が描かれていることに注目しておきたい。初心者の「ぼく」には「あいつをやり出すと、中毒みたいになるからな」「一本以上抜いちゃいかんな」などと注意する者がいて、売血行為の裏側にべたりとはりつく何とも言えないうしろぐらさが描写されるが、そこには小説的なリアリティが認められる。この手のうしろぐらさは、必ずしも個人の感覚にとどまるものではないし、小説的虚構の中で回収されるものでもないが、多くの者が感じながらも言葉にされないままやりすごしてきたものであり、小説的描写を通してしか表現し得ないものであろう。

一九五〇年代初頭を生きるテクスト内の供血者たちは、供血をいいものだと考えてはいない。そのことをそれとなく共有し笑いに転換しながら許容しあい、しかしできれば関わらないほうがいいものだと考えている。それは法的な規制とは無関係であり、身体観や労働観にかかわる漠然とした倫理観に由来するものだと思われる。その漠然とした倫理観は、「死者の奢り」に描かれてい

たアルバイト（大学病院と医師が雇用主となり、学生に斡旋してやらせていた解剖用の死体を洗って運ぶ仕事）がそうであるように、必要性が認められ違法ではないがまともなことではない、という世間の共通感覚と通じている。すなわち、輸血用の血液のように明らかに必要とされるものが、私たちの元に届けられるまでには目を背けたいようなプロセスもある。それに薄々感づいていたとしても、事実を目の前につきつけられると人は嫌悪感を抱きがちであり、その一方で、当事者の心中にはうしろぐらさが胚胎するのが現実なのだ。有益性の享受、公益への貢献という結果があっても、プロセスを許容できるとは限らない、という人情があるようだ。

一九五二年の表象

「黄金時代」が発表されたのは一九六七年八月であるが、「黄金時代」の語りの現在は、一九五二年である。正確に言うと、「ぼく」が東京の大学に合格して「九州から上京した」「一九五二年の四月」以降の四ヶ月ほどである。事件と呼ばれる出来事の多かった「一九五二年」という多面体を、後世の視点からふりかえった語り手は、いくつかの断面を切り取ってテクストを編んでいるのだが、ひとつは「朝鮮での戦争がようやく終りに近づこうとしている」ときであり、ひとつは「メーデー事件」（五月一日）の年である。そして、テクストには書かれていないが前提となるのが、サンフランシスコ講和条約の直後という時空間である。すなわち当時の日本は、占領軍（実質的には米軍）から解放されて政治的に独立（一九五二年四月二十八日発効）したばかりであり、テクストにおける朝鮮戦争もメーデー事件も、その文脈で捉える必要があるのだ。

朝鮮戦争、メーデー事件、日本の独立…これらの背景にはアメリカの世界戦略があり、その一環としてソ連の勢力を睨んだ反共政策があった。当時の吉田茂内閣は全面的にそれを支持して対米単独講和を目指したが、東京大学総長がそれとは異なる主張（全面講和）をおこなうなど、知識人の多くが政府の方針には批判的であった。「メーデー事件」の発端となった皇居前広場（人民広場）の使用の認否をめぐっても、東京地裁の見解は、占領軍

及び日本政府の見解とは異なるものであった。

こうした混乱を、大掴みに読みとることは可能である。いちいち具体的な経緯や事象がテクストに書き込まれているわけではないのだが、少なくとも一九六七年の初出の時点で「黄金時代」を読み、十五年前の空気を思い出すことのできた読者にとっては、無意識に察知される類のコンテクストだったに違いない。だが、そうした読者に限ることもないだろう。どれも今の日本社会を形づくる起源となる事象であり、身体で感得すべき常識的感覚に属するものだと言ってしまうこともできるからだ。実際、テクストは、一九五二年の日本をとりまく状況に対して、その後の日本の在り方を決定づけるような諸事象を中心にして捉えているのだが、それらは断片的にとりあげられるにとどまり、登場人物に対しては、重要な諸事象の周縁に位置する「ぼく」を中心に据えて物語を展開している。「ぼく」は、一連の動きの渦中にはいないものの、混乱した状況の中で同じ空気を呼吸していた者である。「ぼく」の物語を読みとる際にも「一九五二年」に対する一定の理解が必要な所以である。

「ぼく」が高見沢ら「活動家」に誘われる「デモ」は、「破防法」(破壊活動防止法)を標的としている。明示されているのは「破防法」に対するものであるが、朝鮮戦争に反対するデモ、朝鮮戦争にともなって創設された警察予備隊に反対するデモ、そしてメーデー事件をめぐるデモも当然起こっていたと思われる。「破防法」制定の動きは、過激なデモが導いたものだとも言えるだろう。しかし、「ぼく」がデモに参加する余裕はなく、運動の渦の中心にいたわけではない。無縁ではない場所に遠巻きに存在しているのだ。床下生活で「七月」を迎え「新宿で起った火焔壜事件も、大阪の人民電車の事も、ぼくは知らなかった」という語り手の説明も、意図的に「朝鮮人」がかかわる事件に言及し、それを「ぼく」の遠景に置くものである。また「ぼく」が大学で選んだ専門がロシア文学であり、熱心にロシア語を勉強しているという設定からは、ソビエト連邦(当時)をはじめとする共産主義国や、いわゆる革新勢力へのシンパシーが感じとれる。

一九五二年における一九四五年

次に、「黄金時代」に書き込まれている「ぼく」の時間認識について検討しておきたい。テクスト中には、ふたつの時間軸がはっきり提示されている。「一九五二年四月」以降の語りの現在時と、「ぼく」のなかで思いだされる時間としての一九四五年（現在時からみて「七年」前）である。前者は、先に述べたように「メーデー事件」の年であり「朝鮮での戦争がようやく終りに近づこうとしている」ときであり「ぼく」が大学に入学した年である。それに対して後者は、「敗戦後の北部朝鮮で、満州からの難民と一緒に収容されていた少年時代」である。したがって、ここでは、朝鮮半島という空間がふたつの時間軸をつないでいるのである。

一九四五年の日本の敗戦は、朝鮮半島における日本統治を終焉させるが、ソ連と米国による南北分割統治をもたらした。一九五〇年には朝鮮戦争がはじまり、（先述したように）それを契機として警察予備隊が創設される。現在の自衛隊の起源である。日本は「再軍備」と言われる道を（米国とともに）歩みはじめることになるのだが、隣国の戦争に際して「再軍備」をおこなうということは、戦争に関与することを選択するということであり、南北どちらかを軍事的に支援するということを意味していた。当時まだ占領下にあった日本が独立を目指すには、アメリカとの講和が前提であり、そのアメリカの意向にしたがう道が日本独立への道であった。朝鮮半島を舞台にして繰り広げられた米ソという大国間の（代理）戦争は、地球上の既存の諸国家を二つに分割するような、そして世界を二分するようなイメージを与えた。当時の米ソ間の対立は観念的な「冷戦」などではなく、日本は戦争の当事者でもあった。朝鮮戦争と日本との関係は、そのように一筋縄でいかぬ密接なものであり、そのことについて「ぼく」のような引揚者は、身体で実感していたものと思われる。

朝鮮戦争で（占領下の）日本政府は、南（南朝鮮、韓国）を支援するわけだが、国民（あるいは日本における朝鮮籍・韓国籍の定住者）の中には、南を支援する者以外に、北を支援する者、南北双方を支援しようと考える者、ま

ずは「再軍備」それ自体に反対する者などがいた。彼らは革新勢力と呼ばれ、しばしばデモなどの活動の主体となった。「ぼく」の同級生たちの「活動」の実態は（朝鮮戦争をめぐるだけでも）多様であり、そうした機微について「ぼく」は引揚者だからこそ敏感になる部分もあっただろう。朝鮮戦争はその後も「終り」に至っていないので、休戦ということになるのだが、その時期、敗戦国日本はアメリカとの単独講和を結び、ようやく政治的に独立する恰好となる。そういう空気が、一九五二年という年の一端を形成していたのである。

一九五二年の東京を生きる「ぼく」によって思い出されている「七年」前の「少年時代」、すなわち一九四五年は、日本にとっては敗戦の年であり、アメリカやソ連にとっては勝戦の年、新たな帝国主義への一歩を歩みだした年である。朝鮮にとっては光復・解放の年であるが、新たに分割統治を受け入れざるを得なかった年でもある。そして「ぼく」のような引揚者にとっては、引揚げが開始された年、すなわち、故郷だった地を喪失し外地から本国への帰還を余儀なくされた年であった。引揚者にとっての帰還とは、懐かしい我が祖国への帰国などという言葉で表現できるものではなかった。五木寛之自身の言葉を借りるなら、「私は朝鮮半島において、よそものとして少年時代を過し、九州に引揚げて来てからは、外地からやって来た余計者として扱われて来た。当時の日本にとって、外地から体一つで帰って来た引揚者たちは、まぎれもない厄介者であったわけである。故郷は私に取って異国も同じだった。そこでは、むしろ追放されて来た外地の山河の方が、私の郷愁をそそるのだった」。「それらの土地が、すでに私とは全く無縁な、失われた場所として在ることが、私の感慨を一そう色濃いものとして強くよみがえってくるわけであろう。／そしてまた、それが私自身の意識するとせざるとにかかわらず、自分に取って一つの罪の土地であったという観念もまた逃れ難い重さで迫ってくるのだ」（『風に吹かれて』読売新聞社、一九六八）ということになる。かつての朝鮮こそが「郷愁をそそる」ふるさとであるが、その場所はすでに失われた土地であり、喪失されてもなお「一つの罪の土地」として刻まれている。そのような「ぼく」に

とって、祖国日本の未知なる首都東京は、まぎれもなく「異国」の地だったに違いない。

テクスト内で「ぼく」が「少年時代」を思いだす場面は二カ所だけである。一度目は、工場の仲間と口汚くも交流して「奇妙な連帯感をおぼえ」る場面であり、二度目は、採血するがその分の金をうけとらずに工場の門を出ていく場面である。

一度目の「奇妙な連帯感」については、「弱い小動物のような目つき」の「或る種の優しさ」に包まれながら味わったもので、そのとき「ぼく」は「上京以来はじめて」「なつかしい」という感情を得、「敗戦後の北部朝鮮で、満州からの難民と一緒に収容されていた少年時代の事を、ふと思い出」す。「七年という時間をとび越えて、二つの世界が不意に結びついてくるような感じがした」という言葉でその場面が閉じられるのだが、一九四五年と一九五二年の「二つの世界」を結びつけているのは、朝鮮における少年時代の記憶である。「ぼく」を大学生一般の肖像と隔てているものがあるとしたら、第一にそれはこの記憶にある。

二度目の工場を出る場面では、「ぼくは、以前にも少年時代にこんな日があったような気がしていた。白い乾いた河床と、半島の赤茶けた山肌が頭に浮んだ。あれは三十八度線を越えて、開城へ歩いた時だったかな、と思った」と描かれている。では、「こんな日」とはどんな日なのだろうか。このすぐ後で、「これがおれの黄金時代なのだ、と自分に言いきかせながら」地面に倒れこむ末尾の場面になるので、第一に、ふらぁっと倒れ込むような体験をした日であろう。第二に、工場で陽子との「和解」が果たせずに採血する場面でもあるので、「三十八度線」が国境線になってしまったこととオーバーラップさせているのであろう。第三に、結局はどの場所からも疎外されて身体的にも限界に近くなるわけだが、そうした事態を招いた要因は自分（たち）にあるのではないか、という想像力が働き、陽子にしてしまったことと朝鮮にしてしまったことが重ねられているのであろう。いずれにしても、「開城」というのは、アメリカ軍が開設する日本人難民キャンプがあった場所であり、また南北朝鮮のいずれに属するのか、何度も何度も奪いあってきた

領土であり、南北間の離散家族のもっとも多い地域である。そのような場所を見てきた若者が進学のために上京したとき、はたして東京はどのように見えるのだろうか、ということを描いたのが「黄金時代」なのだ。

大学生と労働者の間で

さて、「黄金時代」は、上京して武蔵野に暮す大学生を描いた小説である。彼の大学生活はどのように表されているのだろうか。

生きるためにおこなうアルバイトは、すべてに優先される。したがって、大学生であるにもかかわらず、たいていの授業には出られない。だが、それでも勉学への意欲が損なわれることはない。たまに姿を見せると、クラスメイトたちが心配する。理由あって欠席するひと癖ありげな同級生をできれば留年させたくないのである。それは「横井助教授」のような先生も同様である。他方で、工場にもまた彼を心配する仲間がいる。売血（生活）には常習性があり、大学生にとって癖になることは精神的にも身体的にも致命的だと思われているからである。

「ぼく」のような若者の存在は、小説の中とはいえ現代の恵まれた大学生の根幹をひそかに揺るがすこともあり得るだろう。小説中でも、「ぼく」の生き方に「コンプレックス」を感じる人物が登場する。同級生の高見沢である。「長身で引き緊った横顔」で「鉄鋼労働者のリーダー」然としたところもある高見沢の姿は、「学生の群の中でもひときわ堂々と見え」るのだが、「ぼく」に対して次のように囁く場面がある。「君を見てると、ぼくはいつもあるコンプレックスを感じるんだ。君は気づいていないかも知れないが」。

なぜ高見沢のように経済的にも心理的にも余裕のある都会人が「ぼく」にコンプレックスを感じるのか。その理由は台詞中にも語りにおいても明らかにされていないのだが、おそらくそれは、「ぼく」が勤労学生だからである。経済的に自立し自活している学生が傍らにいるという事実は、単純に、そうでない学生をなんとなく居心地悪くさせるものである。また、勤労学生のような末端の労働者は、学生活動家にとっては参照すべきひとつの基準となり得る。

というのも彼らは、法律制定、特定の国との条約締結、他国の戦争（への日本の関与）といった世の中の動きと対峙し、それらによってひきおこされる社会の諸矛盾と闘うことを目的として活動しているわけだが、その矛盾とは誰にとっての矛盾なのかということを考えたとき、自身の中には明確な判断基準を見出しがたいからである。保護者の経済的援助に頼って暮らしている大学生が自らの内側をどれだけのぞいても、見出せるのは観念的な正義感や義憤であり、社会的な経験の蓄積が育む拠りどころ、自らの成熟した知性を宿した身体で獲得したものではない。また、学生たるもの学問的蓄積を通じて自らの拠りどころを培うものである、という選択肢がそこにない以上、説得力に欠けるとしても仕方がないだろう。近代文学史上、書生、青年、女学生は、小説中の主要人物となり、多くの物語を提供してきたが、そこで起こる事件の多くは、本来いるべき場所というよりも、遊郭や病院や移動先、散歩中や旅行中や療養中や夏休みに起こっている。国内外の文学を学ぶ教室で沸騰した文学論や政治学を学ぶ場で起きた政策論議が青春小説に物語を提供してきたことなど、ほとんどなかったのではないか。宙ぶらりんな場所と立場において（だからこそ）、葛藤や懊悩をみせる。「黄金時代」においてそのような葛藤や懊悩をみせてくれそうなのは、「ぼく」にコンプレックスを感じている高見沢のような学生である。「ぼく」にも陽子とのぎくしゃくした関係性があり、妄想と現実とのギャップを経験する場面があるが、青臭い悩みには至っていない。経済的にも容姿にも恵まれている高見沢に対して、そういう点でのコンプレックスが描かれることはない。

では、「ぼく」はコンプレックスのない人物（あるいはあっても自覚できない人物）として表象されているのかと言えば、もちろんそうではない。それは、「活動」に対する「劣等感」として説明される。大学でも工場でも認知されている「ぼく」は、自身も双方に対して親近感をもち、それぞれの仲間からそれぞれ微妙に違う「優しさ」を感じている。と同時に、隔たりも感じている。そして、「活動家」としてデモに参加している高見沢ら大学の友人たちに対してははっきり「劣等感」を感じてい

る。なぜなら、彼らが「歴史」に参加しているように見えるからである。他の学生に比べてお金がないこと、保護者からの援助がないこと、そして授業に出られないことが問題なのではない。「ぼく」が求めているのは、授業にまじめに出席して奨学金を獲得するような成績優秀者になることではなく、学生として社会（それは大学の外に想定されている）に影響を与えて「歴史」に関わることのようだ。

そのような「ぼく」の価値観をよそに、学業を大事にすることを説くのが立野陽子である。「製薬会社で供血者の血液検査」をしている女の子のひとりである陽子は、ふらふらと現われた彼のことを本気で心配し、彼が大学生と知るや「よしなさい、こんな所へくるの」とたしなめる。青森県の八戸から上京して工場で働いている彼女は、大学生という存在に関心を寄せているが大学で学ぶということに憧れがあるのかもしれない。学部の名を訊ねもする。「ぼく」は陽子に恋情や俗情を抱き、妄想の中で彼女を美化し、含羞とともに行動をおこすが、うまくはいかない。「ぼく」の陽子への思いの強さの中には、素朴な好意だけではなく、大学生が社会人と対等と接しようとしたときに感じるひけ目からくる反動のような感情がありそうだが、そこまではっきりとは描かれていない。ただ、陽子への過剰な期待、美化の自覚と予定調和的な失望には、「ぼく」自身がなりたい自分とそうなれない現実との落差が投影されている。そう考えると、「ぼく」の中にある高見沢への羨望として説明されている「歴史」への参加云々という通りのよい表現には、「都会」（＝イメージとしての東京）への参加という幻想が隠れているようにも思われる。

経済社会においては正規の構成員ではないが社会的正当性を有する大学生という共同体と、世の中の役に立っているが社会倫理的（および医学衛生的）正当性を有するとは考えられていない売血の世界。「黄金時代」は、ふたつの場所を往き来しながら、どちらにも帰属しきれない「ぼく」の物語である。タイトルの「黄金時代」は、「神社の床下」をねぐらにして売血で暮している「ぼく」の「今」の自称である。これは、みずからに言いきかせるための強がりであると同時に、文字通り、輝かしく

も、のびのびと晴れやかな気持の誇張でもある。そのような気持をもっていられるのには、いくつか理由が考えられるが、ひとつには、どちらにも片足をつっこみ（しかしどちらにも埋没せず）どちらとも関わっていることに愉しさを感じているからであろう。

しかしながら「ぼく」は、（「ぼく」の物語の中で）いつまでも両者の間を漂い続けているわけではない。後半、折り合わないはずのふたつの世界の住人同士が「ぼく」を介して直接向き合う場面がある。舞台は新宿の名曲喫茶、風月堂である。そこでは、インテリ気取りの者たちが、外国語をまじえて語り合い、店内に流れるクラシック音楽についての蘊蓄をたれるのがお約束だ。あるとき「ぼく」は、彼女を誘って紀伊國屋の洋書売場で待ち合わせた。そして風月堂に行ったふたりは、そこで高見沢とその連れの女子大生（杏子）と偶然相席になる。高見沢と杏子は、余裕派の青年・女学生であり、「ぼく」と陽子は、勤労学生・女工であった。インテリお坊ちゃんお嬢ちゃんとルンペン・プロレタリアートの組み合わせである。「ぼく」と陽子は、風月堂のような場所に馴れていない地方出身者であることが露呈する。また以前は「鉄鋼労働者のリーダー」にも見えた高見沢も、ここでは裕福な家庭で育っていることを隠しきれなかった。

ぼくは目をあげて、高見沢と、その女友達を眺めた。彼はおそらく中流以上の家庭の息子だろう。彼がピアノを弾くという話は、はじめて聞いた。彼がバロック音楽を好きだという事も知らなかった。彼はクラスのアクティヴでありながら、語学もちゃんとやっていた。高見沢とぼくとは違った世界に住む青年だった。恐らく彼は、血を売って金をくれる工場が存在する事さえ知らないかも知れない。だが、高見沢は少くとも現実に歴史に参加していた。自分はそうではない。ただ、生きているだけだ。それが自分の責任ではないにしろ、現実にぼくは何もしていないのだ。

ここに描かれているのも、互いのコンプレックスのことである。換言すれば、高見沢が無意識にも敬意を払っ

てしまうであろう「ぼく」の世間知のことと、「ぼく」が敬意を払わざるを得ない「歴史に参加してい」るという高見沢の現実である。このときここではっきりしたのは、ふたりが「違った世界に住む青年」だということにすぎないのだが、初対面の陽子と杏子は違った。噛みあうはずのない女子大生と女子工員は、おそらく、互いに何らの敬意を払うこともなく、すれ違う。しかも、女工の陽子は席を立って帰ってしまうのだが、「ぼく」はそれを追わない（「君を見てると、ぼくはいつもあるコンプレックスを感じるんだ。君は気づいていないかも知れないが」と高見沢が囁いたのは、まさにこの場面においてである）。

結果として「ぼく」は、1対3の3の側、大学生の側に立つことになる。実際、このような場合には、たとえば森鷗外「舞姫」の太田豊太郎のように、いちどは己の身分を捨てて、異世界の住人の人生と関わるところまで踏み込むという選択肢もあり、小説中にはそういう人間もいるのが常であるが、そういう道は、想定だにされていない。「ぼく」の物語は、エリスを妊娠させて捨て去り後から「文（ふみ）」の形で回想して友人への恨みを記す豊太郎の物語のような展開も、そこで他人の人生と向き合う覚悟を決めて異国でとことん生きてみる、という方向性ももたない。あえて「舞姫」の例を出したのは、「ぼく」の認識における東京とは、豊太郎にとっての独逸（ベルリン）に匹敵する異国性を備えた空間だからである。さらに、「ぼく」の逼迫ぶりは「免官」後の豊太郎の状況など問題にならぬくらいのものであり、あらかじめ後ろ盾をもっている豊太郎の安定ぶりは、比較するのもおぞましいほど強大である。異国の豊太郎よりも東京の「ぼく」のほうが遥かに孤立無援である、ということはいくら強調しても強調しすぎることはないだろう。そのような「ぼく」が、東京から少しだけ離れた武蔵野にある「神社の床下」を快適な空間だと言ってのけたのは、まことにもっともな話である。

「よしやうらぶれて／異土の乞食と／なるとても／帰るところに／あるまじや」（室生犀星「小景異情」その二）。帰るところではないのが「ふるさと」であった。

まもなく五木寛之は、「自伝的小説」と銘打たれた『青春の門』の連載を開始する。そこでは、あたかも故

郷の筑後を封印するかの如く筑豊の風土が描かれ、みずからの出自を詐称するかの如く筑豊の男（伊吹信介）が形象される。第二部「立志篇」（後に「自立篇」）では、上京してはみたものの東京で生きていく自信と目的を見失いそうになった信介が、ボクシングと出会い、東伏見にある指導者の家に居候をしながらトレーニングに励み、ふたたび立ち上がるきっかけをつかむのだが、主人公である伊吹信介にとって、しばし喧噪を忘れ、酒を断ち、健全で充実した生活を送ることのできる場所として表象されているのもまた「武蔵野」であった。

注

（1）本稿は、西東京市高齢者大学とひばりが丘公民館市民講座においておこなった講演会「西東京市と作家たち―五木寛之と村上龍を中心に―」（二〇一一年）の内容の一部を大幅に加筆修正してまとめたものである。

（つちや　しのぶ　本学教授）